家庭、地域…曲がり角

21世紀の日本人の心はどうあるべきか――。社会への提言を目指し、有識者16人が昨年4月から、「こころを育む総合フォーラム」で進めてきた討議も終盤を迎えた。3回目の特集となる今回は、「家族」「道徳教育」「地域」の三つのテーマをめぐり、ゲストの専門家による基調報告とともに、メンバーとの討議を紹介する。

（構成・調査研究本部　伊藤哲朗）

家族の変化をめぐって

「いまや子育ての知恵も教育で補うしかない。子育てに理解を深める教育プログラムが重要だ」

「報告で親子という言葉を使ったが、その定義を」

菅原「ふだんは親という言葉は使わず養育者、ケアギバーと言っている。養育者と言うことで、すべての親的な人が含まれる」

信田「虐待された人たちの中には、3軒先の家に行って『この家の子にしてください』と言った人が何人もいる。血縁信仰、親子の愛情信仰をシャッフルしたほうがいいと考える。妻に暴力をふるう夫の99・9％は『妻を愛している』と言う。受けとめ方との食い違いに気づいていない。家庭に法律が入らなければ、救われない人たちがいることも認めてほしい」

「日本は母親への尊敬の念が低すぎるのでは」

菅原「埼玉のある団体は、子連れの女性を見たら、ご苦労さまと声をかけようという運動を進めている。お母さんを尊敬するのよ、という教育が大事だろう」

「婚姻届を出す際の子育ての教育について、具体的にどうお考えか」

信田「一緒に暮らすとはどういうことか、当たり前のことを講座で勉強してもらう。子供家庭省とか女性権利省とかあれば、ライフサイクルを通した政策ができるのだが」

学校に道徳の専門家を

孤から個へ――
共に生きる力を育む道徳授業

福島博子氏
（さいたま市立内谷中教諭）

自他の生命を大切にし、ともに生きる喜びを感じる心、力を育てていけたらと願い、道徳の授業で実践してきた。子どもたちは言葉に詰まったり、涙をこぼしたりする。教科の授業では見えない子どもたちの思いを大切にしていきたい。

ただ、週に1時間の道徳の授業があることで、逆に浮いている感じもする。子どもたちも先生たちも、道徳の時間も「孤立」の「孤」になっていないか。各学校に1人は道徳の専門家がいるというふうになったら、どんなに心の教育は発達するだろうかという思いも持っている。

地域体験で人間力育む

地域教育の意義を問い直す

市川伸一氏
（東京大学大学院教授）

学校だけでは、社会でどう生きていくかという問題に対応しきれない。地域では、働く人、ボランティア活動に携わる人、母親以外の主婦とかかわることができる。「社会に生き、社会をつくる人間」としての自覚は、こうした地域での体験で得られていく。

私は、社会で自立し生きていく力を「人間力」と考えたらどうかと提案した。自治体や市民団体、大学、企業が、地域でさまざまな教育プログラムを提供している。活性化させたい。地域の大人たちの姿を見ながら心と人間力を育む仕組みが機能すればと願う。

生の実感持てるように

地域で育つ子供・若者

相川良子氏
（渋谷区青少年教育コーディネーター）

子どもたちが1人の人間として育つ場所は、地域の中にしかないと考えた。学校が限界を抱えた時、地域の力を持ち込むことで再び元気になるのではないか。教職を退くと、「ファインイン」という子どもや若者の居場所をつくった。

ファインインは8年目を迎えた。子どもや若者が立ち寄る場、多様な人とかかわる場だ。若者たちの「育つ感覚」は、人とのかかわりの中で自分が役に立ったという感覚を持てた時に生まれる。社会で役割を担っていく、生きていく実感を強く持てるようにしてあげたいと思う。

こころを育む総合フォーラム

遠山敦子氏を発起人に各界の有識者16人が集まり、昨年4月に発足。山折哲雄氏を座長に月1回、「日本人の心のあり方」について討議を続けている。今秋に提言として発表し、10月にはシンポジウムを開く。これまでの討議の概要はフォーラムのホームページ（http://www.kokoro-forum.jp/）で紹介している。

フォーラムのメンバーは次のとおり（敬称略、五十音順）

安西祐一郎（慶応義塾塾長）
石井幹子（デザイン事務所主宰）
葛西敬之（ＪＲ東海会長）
金澤一郎（国立精神・神経センター総長）
佐々木毅（学習院大学教授）
滝鼻卓雄（読売新聞東京本社社長）
張富士夫（トヨタ自動車副会長）
遠山敦子（松下教育研究財団理事長）
永井多恵子（ＮＨＫ副会長）
中村邦夫（松下電器産業社長）
中村桂子（ＪＴ生命誌研究館館長）
野依良治（理化学研究所理事長）
本田和子（お茶の水女子大学名誉教授）
三村明夫（新日本製鉄社長）
山折哲雄（国際日本文化研究センター名誉教授）
鷲田清一（大阪大学副学長）

こころを育む総合フォーラム

道徳の授業を考える

「地域の大人に道徳の授業に登場してもらい、人生を語っていただくといい。一番吸引力があるのは人間そのものではないか」

福島「先日も、目の不自由なピアニストの方に教室に来ていただいた。ゲストティーチャーなどの言い方で現場で定着しつつある」

「学校が、心の問題で果たせる役割をもっと考えてみたほうがいい」

西野「なぜ道徳の時間があるのか。子どもたちにどんな価値観を身につけてほしいのか話し合ったり、考えたりするための中核になるのが道徳の時間だ。社会でどう生きたいのか、自分を発見することでもある。そういう場を与えるのが道徳教育と考えている」

福島「道徳教育に対する私の思いは、教師が自分自身の生き方を子どもたちとともに問い直すことだ。教師も子どもたちもまずは自分の気持ちを伝え合うところから始め、高いところを目指していけたらいい」

21世紀の地域教育とは

「学校も選択制になると、子どもたちは地理的空間を越えて移動する。地域教育をどうとらえるべきか」

市川「大人たちは、家が近くなくても問題に関心のある人たちで集まる。子どもたちも自分の興味に基づき、大人の活動に参加するようになるだろう」

相川「新潟の山村の人たちは、『ここも渋谷と同じですよ』と言う。過疎地なので子どもは車で学校に行き、車で帰る。外で遊ばない。放課後改革が必要だ」

「駒大苫小牧高校で、卒業式を終えた野球部員が酒を飲み、たばこを吸って補導された。それで現役部員が選抜高校野球に出られなくなった。なぜ、この大人たちの暴走を地域社会がとめられなかったか。地域の力が弱くなっている」

「戦後1クラス70人という学校で教わったが、先生の情熱は強かった。日本では、情熱と能力が十分にある人でも免許を得るのに1年半もかかってしまう。改善点の一つではないか」

市川「大人になると社会でどんな役割を担うのか、を考える経験は弱かったのではないか。それをどう教育に持ち込むか。学校教育は基礎の部分を受け持ち、多様化のほうは地域で考えていくべきだ」

パパとママの信頼大事

子どもの心の発達と家族関係

菅原ますみ氏
（お茶の水女子大学大学院助教授）

私たちの長年の研究で、子どもの心の育ちには、両親の夫婦関係が重要であることが見えてきた。子どもたちが家庭でほっとできるかどうかは、両親が一緒にいて楽しそうかどうか、がかかわっているのだ。

そうした夫婦関係は、子育ての初期に大事な形成期がある。子どもが小さい時における、夫の家事・育児への協力が、妻の夫への信頼感を再形成する。妻が、その信頼感をうまく築けるかどうかが重要になってくるのだ。パパがママをいつまでも好きだということが、子どもたちの幸せの半分を担っている。

衰退する「子育て力」

家庭――
家族内暴力の視点からとらえる

信田さよ子氏
（原宿カウンセリングセンター所長）

虐待問題の相談で各地に行くが、子どもを育てるという自覚がまったくない親が多くなった。児童相談所が子どもの保護に乗り出すと、「何で?」と驚くという。この層の拡大がどんな子どもたちを生み出すのか危機感を持っている。

子どもを育む力が衰退している。私たちは、親は子をかわいがるものという前提を捨てなければならないのではないか。問題は、婚姻届の受理の条件として子育て講座を受けてもらう、母子手帳の発行の際に子育てを学んでもらう、といったことを考えざるを得ないところまで来ている。

〝かかわり〟の形成課題

学校における育むべきこころとは

西野真由美氏
（国立教育政策研究所総括研究官）

道徳は家庭で教えるものだとする意見がある。学校とは家庭と社会をつなぐ場ではないか。子どもたちが社会に出て、いろいろな人と出会い、自分を実現していく。そのトレーニングの場として学校はある。

いまの道徳教育は、自分自身のこと、他者とのかかわり、自然や社会とのかかわりを学ばせようとする。道徳教育が難しいと敬遠されるのは、このかかわりをつくり出せないためだ。先生たちの間に、子どもをどう育てていくかという話し合いもない。かかわりをどうつくり出すかが一番の課題になっている。